

I. 言語活動を重視した授業への改善 —「表現」の授業における言語活動—

市 川 郁 子

1 はじめに

音楽科のねらいや特性に応じた、確かな目的をもった言語活動とは何か、前回の研究では、言語活動の果たす役割や活用方法等について鑑賞領域の授業を中心に研究を進めた。京都市立第三錦林小学校における実践を通して明らかになったことは、「鑑賞における言語活動は他者とのコミュニケーションを図り、音楽表現に必要な感性を、より豊かにすることに役立つ」ということ、「音楽を知覚・理解し、音楽的な知識の定着を図ることに役立つ」ということの2点である。

また、言語活動の効果的な活用についても学習の流れと対応させて検討することができた。そこで、表現領域の学習においても、それらの成果を活用できるのではないかと考え、「表現領域における言語活動」について研究を進めることにした。

2 研究目的

表現領域の器楽学習においても、言語活動を適切に活用することにより、感性を豊かにし、音楽表現の質を高めることができるのではないかと考えてに基づき、以下の目的のもと研究を進めた。

○表現領域における思考力・判断力・表現力の育成につながる言語活動のあり方について検証する。

3 研究の方法

全教科の学習において言語活動の充実が求められる中、音楽科の学習に求められる言語活動について、すべての教員が理解を深め実践できるよう、京都市立山ノ内小学校において全教員を対象に模擬授業を行った。表現領域における思考力・判断力・表現力の育成につながる言語活動の設定場面やその内容につ

いて模擬授業の分析をもとに考察を進めた。

今回取り扱った「山のポルカ」(チェコ民謡 阿部栄彦編曲)は、教育芸術社の3年生の教科書に、「旋律の特徴を感じ取ろう」という題材の中の一曲として取り上げられている器楽教材である。本教材の学習では、**ア**と**イ**の異なる二つの旋律の特徴を感じ取り、思いや意図をもって曲想にふさわしい表現の仕方を工夫することがねらいである。軽やかで、はずんだ感じの旋律**ア**をリコーダーの斉奏で、なめらかで、ゆったりとした**イ**の旋律をリコーダーの二部合奏で扱う。**ア**と**イ**の旋律の特徴を生み出している拍子やリズムを生かして演奏するために、どのように言語活動を設定していくのかを考え授業を構想した。教材の目標と各時間の目標と評価規準を次のように設定した。

○教材の目標 旋律の音の動きやリズムに気を付けて演奏する。(2時間扱い)

○各時間の目標と評価規準

- ・1時間目 曲想と曲の構成を捉え、運指に気を付けて**ア**と**イ**の旋律を演奏する。

評価規準 ・曲想を感じ取り、楽曲の構成に気付いている。

- ・ミとファの運指を知りタンギングに気を付けて演奏している。

【ア音楽への関心・意欲・態度】(学びの姿勢)

- ・2時間目 **ア**と**イ**の旋律の感じの違いを生かして演奏する。

評価規準 ・**ア**と**イ**の旋律の特徴を捉え、それらを生かした演奏をしている。

【ウ音楽表現の技能】(演奏聴取と振り返り)

4 実践の概要



実施した授業は、2/2時間目の授業で言語活動により楽曲を特徴付けている根拠を見つけ、それらを生かした表現を創っていく学習である。





本時の目標 ○**ア**と**イ**の旋律の感じの違いを生かして演奏する。

本時の展開 (2/2時間)

| 場 | 学習活動 | 留意点 | 評価規準 |
|---|--|--|---|
| <p>感受する</p> <p>↓</p> <p>思考・判断・分析する</p> <p>↓</p> <p>音楽を知覚する</p> <p>↓</p> <p>表現に生かす</p> <p>↓</p> <p>音楽を知覚する</p> | <p>1. ㊦と㊧の旋律の違いを比較しながら「山のボルカ」の範奏を聴く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦は軽やかで明るい感じがし、㊧はなめらかな感じがする。 ㊦は弾んだ感じで、㊧はゆったりした感じがする。 ㊦も㊧も踊っている感じがするが、㊦は飛びはねている感じで、㊧は揺れている感じがする。 <p>2. なぜそう感じたのか、音楽の中から答えを見つけ、交流する。</p> <p>○楽譜を見ながら「音楽の素」に気を付けて聴き、思いを交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦は音が細かく動いていたので楽しそうな感じがしたのだと思う。 ㊧は音がゆったりと動いていたのでなめらかな感じがしたのだと思う。 ㊦は音符が細かいので、うきうきした感じがしたのだと思う。 ㊦も㊧も2拍子だから踊り方は違うけれども踊っている感じがしたのだと思う。 <p>○音楽の中から見つけたことを確かめながら再度「山のボルカ」の範奏を聴く。</p> <p>3. ㊦や㊧の旋律の特徴や曲のまとまりを感じ取り、それらを生かした演奏の仕方を工夫してリコーダーを演奏する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 2拍子を感じて演奏する。 ㊦の旋律は8分音符で細かく動いているので少し音を短く切って演奏する。 ㊧の旋律は4分音符と2分音符なので、音が切れないように滑らかに演奏する。 ㊧はフレーズを意識してプレスまで音が切れないように気を付ける。 曲のまとまりを感じて演奏する。 <p>4. 学習の振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「山のボルカ」を演奏して分かったことや気がついたことについて交流し、書きまとめる。 <p>(例)「山のボルカ」は全体的に明るくて楽しい感じの曲でした。曲は㊦㊧㊦になっていて、㊦ははずんだ感じで、㊧はゆったりした感じでした。はずんだ感じを出すために、㊦は、はっきりしたタンギングで少し音を切って演奏し、㊧は流れるような感じになるように音をつないで、息に気を付けてなめらかに演奏しました。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 前時に㊦と㊧の感じの違いを捉えているので、それらを思い出し、確認する。 最初は楽譜を見せない。 ㊦と㊧の感じの違いについて思いを交流し、曲想の変化について確認する。 <p>■言語活動A</p> <ul style="list-style-type: none"> 「なぜそう感じたのか」を「音楽を形づくっている要素」に気付いて表現できるようにする。 友達が見つけた共通事項に共感したり、新しい発見をしたりしながら聞くようにする。 旋律の動き、音符の種類、拍子等が曲想を生み出していることに気付けるとよい。 <ul style="list-style-type: none"> 気付いたことを楽譜に書き込むようにする。 音を通して、思考・判断したことを確かめる。 楽譜や音楽の中から見つけた根拠をもとに、それを生かして表現できるよう技術的な指導を必ず行う。 ㊦では8分音符の細やかな動きを生かして、はっきりしたタンギングで歯切れのよい演奏ができるようにする。 ㊧では4分音符と2分音符による流れるような旋律であり、たっぷりとした呼吸でフレーズを生かした表現をする。 <p>■言語活動B</p> <ul style="list-style-type: none"> 曲想は㊦と㊧の旋律の音の動きの違いによることや、それらの違いをどう表現しようとしたのかという点について交流し、自分の表現でまとめる。 | <p>㊦と㊧の旋律の特徴を捉え、㊦はタンギングを生かし、少し音を切って、㊧は息使いに気を付けてレガートに表現する。</p> <p>【ウ演奏聴取と振り返り】</p> |

意識した言語活動の一つは「感受したことや特徴の根拠を、楽譜から見つける」場面（言語活動A）である。ここでは、楽譜をよく見て、音楽を形づくっている要素（音符の長さ、旋律、リズム）や音楽の仕組み（繰り返し、問いと答え、変化）に着目しながら、曲想や楽曲のよさを生み出している根拠について見つけたことを交流した。

次に、言語活動Aでの意見交流をもとに、やの旋律の特徴や曲のまとまりを生かした演奏の仕方を工夫した。感じ取ったことを生かした表現にするためには、表現技能が伴わなければならないため、リコーダーの奏法について技術的な指導を行った。音楽のよさや美しさの根拠をみつけるために言語活動を行うと共に、他の人の気付きに触れることにより、音楽への理解を深めていった。楽譜をもとに、考えたことや分かったことを拠り所にして「だからどう表現するのか」という表現の工夫について、楽譜に書き込んでいくことにより、楽曲の理解とそれに基づく表現の仕方を確かにした。

そして、学習の最後の場面において、もう一度言語活動（言語活動B）を行った。自分たちの表現を聴き合い、そして、捉えた楽曲の特徴（との旋律の音の動きの違いによる曲想の変化）や、自分はそれをどう表現しようとしたのかについて意見交流や相互評価を行った。この言語活動Bでの活動をもとに、楽曲の特徴を生み出している根拠や、との旋律の感じの違いをどう表現しようとしたのかという点について自分の考えをまとめた。

5 授業分析

表現領域における思考力・判断力・表現力の育成につながる言語活動のあり方について言語活動Aと言語活動Bの場面における発言内容を中心に分析を進める。

言語活動Aの場面は、自分が感じた曲想について、なぜそう感じたのかを、「音楽を形づくっている要素」を根拠にして捉えられることが大切である。提示された楽譜を読み解く活動を通して、曲想を生み出している根拠を見つけていった。他の教員の発言に共感したり、発言から新しい発見をしたりしながら意見交流が行われた。ここでの発言は次のようなものであった。

山のボルカ

♩ = 92-100

チェコ民謡 / 四郎幸彦 編曲

- C1 ㊦の楽譜は、音符が細かいので、楽しくはずんでいるように感じた。
- C2 ㊦の楽譜は、シシラ・シシラ・ソドシラ・ソと音が高くなっているので軽く感じた。
- C3 ㊦の旋律はお話をしているみたいになっているので、楽しく感じた。
- C4 ㊦の楽譜は、二分音符で長いので、ゆったりした感じがした。
- C5 ㊦の旋律も、ゆったりとお話しているみたいになっていて、落ち着いた感じがした。
- C6 ㊦の旋律は㊦の旋律と比べて息が長いので、風が吹いている感じがした。

これらの発言は、曲想を生み出している根拠を、共通事項（音符・音高・リズム・旋律）から見つけている。

C1とC6の教員の発言は、使用されている音符の種類に着目し、音符の組み合わせによって創られているリズムの違いが曲想を生み出していると分析している。C1の発言にある、「音符が細かい」というのは八分音符の組み合わせによるリズムであり、C6の発言にある「息が長い」というのは二分音符と四音符の組み合わせによりできたリズムのことを言っている。C1もC6も「リズム」という音楽用語を用いることができていないのは、「リズム」という言葉が何を意味しているのかが明確になっていないからであると考えられる。教員は、音楽用語の意味を確かに理解していないと、子どもたちが考え、判断したことについて、正しく評価ができない。そこで、筆者は「リズム」とは何かについて補足説明を行い、本教材における㊦と㊦のリズムの違いは楽曲を特徴付けている大きな要素であることを確認した。

C3やC5の教員の発言からは、旋律が繰り返されていることや、少し変化を付けて繰り返されていることに気付いていることが分かる。これは、音楽の仕

組み（構造）としての「反復」や「変化」が曲想を生み出していると分析している。二人の教員が楽曲の仕組みに言及したため、筆者は楽曲の構造について説明を行った。共通事項である「音楽の仕組み」とは何か、仕組みにはどのような種類があるのかについて、すべての教員が理解できるようにするためである。

C2の教員は使用されている音の高さに着目している。これは、音高というよりは、アの旋律はミ〜ドの6度の跳躍やファ〜シの4度の跳躍等、音の跳躍が軽く跳ぶ感じをつくっていると考えられる。一方、㊦は3度音程によるなめらかな進行が、柔らかく、ゆったりした感じをつくっていると考えられる。

言語活動Aの場面では、意見交流により、楽曲の特徴に気付くと共に、特徴を生み出している根拠について考え合うことができた。教員に意見交流をした感想を聞いてみると、それぞれの感じ方の違いに驚くと共に、楽曲を特徴付けている要素を見つけていくことで、楽曲のよさを理解することができたということであった。

指導する教員が楽曲の特徴について理解すること、そして、根拠をもって楽曲のよさを捉えることができる力を身に付けていなければ、子どもに届く指導にはならない。単に楽曲を聴いての感想の交流では、音楽を理解することにはつながらないのである。

言語活動Aの活動の後、教員たちは、気付いたことを楽譜に書き込み、再度範奏CDを聴くことにより、音を通して、思考・判断したことを確かめた。そして、言語活動Aでの根拠をもとに、リコーダーの表現の工夫を行った。筆者はタンギング奏とレガート奏の指導を行うことにより、根拠に基づいた表現になるようにした。言語活動により思考・判断したことを表現に結び付けるためには、必ず技術的な指導を行う必要がある。自分が感じたことを生かした表現を目指すための技術を獲得して初めて言語活動が生かされたと言えるのである。

言語活動Bの場面は、授業のまとめの場面である。曲想は㊦と㊦の旋律の音の動きの違いによることや、それらの違いを自分はどのように表現しようとしたのかという点について交流し、本時の学習で学んだことについてまとめた。記述する前に意見交流を行い、その後に各自が記述した。例1と例2を示す。

(例1)

「山のポルカ」は全体的に明るくて楽しい感じの曲でした。曲は□ □ □になっていて、□ははずんで楽しい感じで、□は風がゆったり吹いている感じがしました。□がはずんで楽しい感じがしたのは、使われている音符が8分音符で細かったからだと分かりました。そして、□が風がゆったり吹いている感じがしたのは、長い2分音符と4分音符が組み合わせられていたからだと分かりました。はずんだ感じを出すために、□は、はっきりしたタンギングで少し音を切って演奏し、□は風が吹いている感じになるように音をつないで、息に気を付けてなめらかに演奏しました。

(例2)

この曲は楽しくてわくわくしました。□ □ □とサンドイッチになっていましたが、それぞれの部分で旋律が問いと答えになっていたのも、お話しをしているようでした。リコーダーの演奏では、お話ししているようにするために、フレーズを意識して演奏しました。□の部分は楽しくお話しをするように、□の部分はゆったりとお話しをするように息遣いに気を付けて吹きました。

例1では□と□の感じの違いを捉え、その違いがなぜ生じているのかという点について音符に着目して記述がなされている。なぜ自分がそう感じたのか、その根拠を音楽の中から見つけていくために行った言語活動Aでの交流が生きている。そして、□と□の感じの違いを生かした奏法の工夫としてリコーダーの息遣いを挙げている。この教員は、実際の指導において、リコーダーの奏法についての技術的な指導を行うことができると考える。より豊かな演奏のための技術指導は、その必然を感じて初めて指導できる。

例2では□ □ □という楽曲の形式（楽曲の構成）を理解している。さらに、楽譜から□と□を構成している旋律が4小節ごとに問いと答えになっていることに気付いた。旋律が問いと答えになっていることを「お話しをしているよう」という表現で示している。問いと答えという旋律の動きに気付いたことにより、旋律のまとまり（フレーズ）を生かして演奏することが大切であると考えることができた。そして、奏法の工夫として、□のフレーズは少しタンギン

グを生かして短く音を切って楽しく、㊦のフレーズはなめらかにゆったりとした息遣いを挙げている。この教員は、フレーズを意識した技術指導を行うことができる考える。

1時間の学びを通して理解したことや表現をしていく上で工夫できることについて記述することにより音楽を知覚し、知識の定着を図ることに加え、演奏技能を獲得することの大切さを確認することができた考える。子どもへの指導は、自分自身が確認し、理解してこそ思いを込めて行えるのである。

6 おわりに

今回は、思考、判断しながら音楽と関わるために、また、様々な感じ方に触れ、自己の感性を高めるために言語を活用した。言語活動は十分に音楽を感じ取ったり味わったりするための手段であり、言語で確かめ合ったことを実感できるよう、必ず音や音楽を通して確かめる活動が必要であった。そして、音を通して確かめると共に、技術的な指導を行うことによって表現が高まることが分かった。表現領域の指導において、技術面での支援は欠くことができないものであり、教員には自己の演奏力の向上と指導力が求められる。

人と人が音楽から感じたことを伝え合ったり、他者の感じ方に触れたりするために、言葉は重要な役割を果たす。豊かな話し合いを通して、個と集団の学習の質を高めていくことも言語の果たす大事な役割である。明確な目標をもった言語活動を表現の授業に組み込むことにより、音楽が知覚でき、表現を豊かにすることができることを教員たちは実感した。このことは、今後の音楽科の学習に生かされるものと考ええる。